世界一のフィルム会社が　牛を飼っていた理由は？

今でこそデジタルカメラというものができて、写真の概念は大きく変わっているが、写真というものはフィルムを使うのが当たり前という時代が長く続いた。

そのフィルム全盛時代を築いたイーストマン・コダック社の創設者ジョージ・イーストマンが、ニューヨーク州ウォータービルに生まれたのが一八五四年七月十二日のこと。

彼は二十六歳のとき、乾板に感光液を均一に塗布して量産する装置の特許を取得して、それまでの大きなガラス板から、柔軟性のあるフィルムに置きかえることに成功した。

最初は紙製のものであったが、改良が進み、より優れたセルロイド製の透明なロールフィルムとなった。

この開発によりカメラは非常に小型化し、写真の大衆化につながった。

一八八八年、彼は重さ一キロしかない箱型のカメラを開発し、「コダック」と呼んだ。

この名前は彼の造語で、「大きな、力強く鋭い文字であるKで始まり、Kで終わるあらゆる組み合わせを考えた結果」で、「簡潔で活気があり、誤記の恐れがなく、具体的な意味がなく、誰にでも発音しやすく、覚えやすいものであること」を条件につくり出したもので、登録商標の大傑作といえる。

量産態勢に入ると、彼は自社製品は自社の材料から作ろうと考えた。

専用の製紙工場や科学薬品工場をその傘下におき、さらに傑作だったのは牧場の経営であった。

フィルムの生産には、感光液を作るために大量のゼラチンが必要である。

そしてそのゼラチンは動物からしか入手できない。

牛の骨・軟骨・皮・腱などを、長時間煮て抽出して作るものである。

それには大規模な牧場を経営して大量の牛を確保しなければならない。

フィルムを量産するためには牧場が必要とは、こういう理由であった。

ワンポイント知識

畜産副生物（内臓）の栄養

畜産副生物（内臓）は、食肉よりもビタミン類が豊富なものがあります。

特にレバーは、ビタミンA、ビタミンB_1、ビタミンB_2などが多く含まれており、成長作用や疲労回復に効果的な食品といわれています。

なお、一度に多く摂取するより、回数を多く摂取する方が効果があるとされています。